『白鯨』のかくれた意味と象徴について (5)

前　田　禮　子

今回は，説教壇と説教のもつ意味について考えてみる。

高い説教壇があって，そこへ登るために垂直のはしごが掛かっている。このはしごの，垂直部分は縄でできて，段は木でできている。

> ...the wife of a whaling captain had provided the chapel with a handsome pair of red worsted manrope for this laddar, which, being itself nicely headed, and stained with a mahogany color, the whole contrivance, considering what manner of chapel it was, seemed by no means in bad taste. (p. 67)

ある捕鯨船長の夫人が美しい赤染めの二本の手すり索を寄進したが，その頂上がみごとに装飾され，黒檀色に塗られていることと合せて，全体の出来栄えは，この礼拝堂の性質を考えてみるとき，けっして，好ましくない趣向とはいえない。これが表面上の意味であるが，赤染 (red)，手すり索 (manrope)，黒檀色 (mahogany) など，象徴としての意味がある。装飾された (beheaded)，には，洗礼者 John やその他の殉者の首の連想がある。Mapple 神父は，はしごをたくし上げて，わが身を Quebec の要塞（＝岩＝説教壇）の中に，難攻不落とした。このことにも意味がある。形而上の問題を象徴しているのだ，と Ishmael はいう。

> ...there must be some sober reason for this thing; furthermore, it must symbolize something unseen. Can it be, then, that by that act of physical isolation, he signifies his spiritual withdrawal for the time from all outward worldly ties and connexions? Yes, for replenished with the meat and wine of the word, to the faithful man of God, this pulpit, I see, is a self-containing stronghold—a lofty Ehrenbreitstein, with a perenial water within the walls. (p. 68)

Ishmael が，キリスト教の教義を肯定して信仰告白をのべても，そのことの意味は，見過されてしまいがちであるが，Ishmael のキリスト教肯定は，修辞的比喩と受けとるべきではない。そこには，かくされた裏の意味など見当らず，Melville の真摯な，厳しい神学解釈があって，宗教の本質をとらえている。それは，試練の中にこそ救済がある，とする考え方であって，当時の Edward Taylor に代表されるような伝統的な宗教観に則している。この作品は，破壊的な要素にみちているので，Melville の宗教観が異端視されがちであるが，それは表面上の判断にもとずいているにすぎない。Melville ほど徹底して，キリスト

教的救済を肯定し激しく求めた例は，めずらしい。彼には，キリスト教の教義にもとずく救済にたいして，悲観的懐疑は，ほとんど皆無である。ヘレニズムや東洋的な要素がからみあって混入しているので，どうしてもキリスト教以外のものが目につきすぎて，Melville の真意が見過されてしまいがちである。たとえば，死の悲しみの中に切り離しがたくかいま見られる Delight の方を，むしろ Melville が期待し直視していることに注目したい。網の目のように表面にあらわれている異教徒的な設定に目を奪われるべきではない。上に引用した文は，よく見ると明るい希望にみちている。Ishmael の楽観的な言葉を，文字通り受け取ってみることにする。Ishmael は，説教壇の趣向について，しばらく考えてみたが，何の理由にもとずくかは，しばらくは，十分に飲みこめなかった。これには，なにか意味があるだろう，と Ishmael はいう。Ishmael が，なにか意味があるだろう，というとき，かならずそこには，かくされたものであれ，表面にあらわれたものであれ，何か意味があるのは，すでに見てきたとうりである。ここは，表面どうりの意味に受けとることにしたい。Ishmael はいう，これには何か冷静な意味をふくんでいることであり，何か形而上の問題を象徴しているのであろう，その身を孤立の位置におくことによって，しばしその魂を，外部とのきづなや縁から断ち切る，ということを意味しているのだろうか，そうだ，言葉の肉と酒にみたされたもの，神の忠実なしもべにとって，この説教壇は，みずから充足する，要塞であり，不滅の泉の水をその要塞内にたたえたところの，高くそびえる Ehrenbreitstein 城（栄光ある石の意）である，と Ishmael は云う。岩の要塞の中から不滅の泉の水が湧き出す，は，キリスト教の根底となる概念であると同時に，この作品の根本主題である。このような概念は，不可能に近い厳しい仮定にであるように見えるが，Ishmael は，けっして実現不可能とは見ていない。それどころか，Ishmael は，そこに，大きな希望を見出して，嬉々とする。Mapple の神父の説教の中の Delightful を神による救済を肯定したもの，と受け取って，解釈をすすめていきたい。現実の否定から入って肯定へ転換していく，そういった逆説の発想の，救済の概念が，この作品の底に，肯定的楽観として流れている。

ここでは，否定が肯定への前提条件である。索梯子をたくしあげて，外界との接触をたち切ることによって，Mapple 神父は，小さな Quebec（原義，岩の意）の中で impregnable になった。不毛になった，の語に注意。不毛が，豊穣のための前提条件である。また注意すべきことは，外面の豊穣は内面の不毛のための，また，外面の不毛は内面の豊穣のための，それぞれ前提条件である。しかもまぎらわしいことには，内面の相貌と外面の相貌とは，たがいに Counterpane になって，同一性を共有している。そのため，physical isolation は spiritual withdrawal from outward worldly ties and connexion を signify することになる。この文の ties and connexion に注意。これらは，すぐ前の，knobs や joint や joints (p. 68) と関連。これら，継ぎ目，節，は，there were certain engrated（継ぎ穂している）clerieal peculiarities about him (Mapple 神父) (p. 67) と関連している。

具象のropes や knobs や joints は，抽象の ties and connexion と同一性を共有している。Mapple 神父は，以前の船乗りの職に神父の職が接ぎ穂されたのだが，これには，岩と泉がつながっている，といったような，また，岩の上に茂る樹木と花，のような，そういった対立する現象の接続を願う意味がふくまれている。寄進されて説教壇につながる二本の索は，manrope とも cloth covered rope とも，Ishmael によって呼ばれ，索と人とが同一次元でとらえられている。これら二本の索は，高くそびえる所に接続している二本の柱のようでもある。また二本の索は，Mapple 神父の説教の構成が，二筋の教訓（a two stranded lesson p. 72）であることとつながっている。

説教壇の背後の，二枚の大理石の碑文の間の壁面には，一枚の大きな絵が掛っている。New Bedford にある実際の Seamen's Chapel の内部には，このような説教壇は存在しなかった。しかし作品の中の，Melville の想像力によるその絵には，黒い岩と雪白の荒波の巻く風下の岸に打ちつけられまいと逆って進む一隻の船が，えがかれている。この船の真上には，台風の目であるにちがいない一点の晴れ間の空間があり，そこからは，飛び散る疾風と黒々と渦巻く雲の上高く，離れ小島のような太陽が輝き，その天使の顔の輝きを船に注いでいる。その船は，雄々しい船（gallant ship p. 64），高貴な船よ（noble ship），と呼びかけられている。船と人の魂が同一化されている。

> ..."beat on, beat on, thou noble ship, and bear a hardy helm ; for lo ; the sun is breaking through ; the clouds are rolling off—serenest azure is at hand". (p. 69)

日の光は貫き通り，雲は渦巻きながら去ろうとしている。もっとも静謐な青空は，すぐそこにある。一条の日の光 the sun is breaking through，これは，説教壇に結ばれた索梯子と同様，十字架を構成する縦の垂直線としての表象である。索梯子は，下から上への動き，太陽の光線は，上から下への動きであり，上からと下からとたがいに求めあうように働いて，天上のものと地上のものが融和しようとする。渦巻き去ろうとする is rolling off，は説教壇の前面の，提琴形の船首に似せて作られた渦巻き形装飾，scroll work，fashioned after a ship's fiddle-headed beak p. 69）に対応している。渦巻き運動とその中心，たとえば，この図のばあい，台風の中心とその周辺の渦巻く雲，もこの作品の主題にかかわる象徴としての意味がある。激しい動乱の中に，もっとも静謐な青空 the serenest azure がある。the serenest，最上級に注意。渦巻きの中心が，寂滅あるいは不滅への通路ではないか，接ぎ穂の節ではないか，とおもわれる。黒々と渦巻く雲 dark rolling clouds を下から突き破って上の serenest azure に手をとどかせようとするのが，捕鯨の船乗りたちである。老練な船乗りたちは犬にたとえられていた Here were a set of sea-dogs (p. 58) が，dog は fog dog（霧峰の中にみられる明るい点，そこから霧が晴れてくる）をおもわせる。

Mapple 神父の接ぎ穂された状態とは，つぎの文からあきらかなように，渦巻く雲の上

の光輝が，雲の下の冬の嵐の状態の中に差し込むきざしが見えるような姿である。

> Father Mapple was in the hardy winter of a healthy old age; that sort of old age which seems merging into a second flowering youth, for among all the fissures of his wrinkles, there shone certain mild gleams of a newly developing bloom—the spring verdure peeping forth even beneath February's snow. (p. 67)

この文と説教壇のうしろの図には，共通点がある。それは，まったく異質のものが接ぎ穂された状態，である。冬のさなかに一点の春のきざしがあらわれる，など新しい展開への移行の状態をあらわしている。

> ... the wall which formed its back was adorned with a large painting representing a gallant ship beating against a terrible storm off a lee coast of black rocks and snowy breakers, But high above the flying scud and dark-rolling clouds, there floated a little isle of sunlight, from which beamed forth an angel's face; and this bright face shed a distinct spot of radiance upon the ship's tossed deck, something like that silver plate now inserted into the Victory's plank where Nelson fell. (p. 69)

Father Mapple が，in the hardy winter of a healthy old age にあること，と，a gallant ship が beating against a terrible storm にさからっている，とは，二つの同質のものの同一化である。同様に，fissures of his wrinkles と black rocks and snowy breakers，また even beneath February's snow と high above the flying scud and dark rolling clouds，また merging into a second flowering youth と floated a little isle of sunlight，また spring verdure peeping forth と beamed forth an angel's face, は，それぞれたがいに対応しあっている。a distinct spot of radiance upon the ship's tossed deck，something like that silver plate now inserted into the Victory's plank と certain engrafted clerical peculiarities about him，imputable to that adventurous maritime life he had led. (p. 67) では，inserted は engrafted に，など，たがいにまったく対応しあっている。

つぎの文は，'*Sermon*' の章のまとめと云えるもので，ここには，かくされた意味はなく，文字どうりに受けとられるべき内容であるが，これまで二重，三重に表象が積みかさねられてきて，抽象的な，内面の問題を語るための言語をすべてイメージ化できる表象にかえてしまう，これがこの作品の文体であるのはすでに見てきたとうりである。つぎの文はごく単純な，わかり易い，見すごされてしまいかねない内容の文であるが，この文の透明さは，すでに積ねられてきた表象の重みとあいまって対照の妙がある。しかし単純なものこそ真実のひびきがあり，技巧の複雑な修辞は，どちらかといえば，不自然で，文体をそこねるばあいがないわけではない。網の目のように，こまやかに繊細に張りめぐらされ

た修辞は，そっと謎めいたままにして，ときほぐさないほうがよいのではないかと，おもわれるばあいがある。Melville の文章は，表面上は，男性的な荘重さと雄大，幻想的な混沌と神秘感と深み，それらが一体となってまじりあい，スケールの大きさでは類をみない。それらの文脈の裏にはりめぐらされ緻密な技巧，しかもそれらをまったく感じさせない技巧，また大胆な性意識と深い宗教哲学，それらがまじりあい働きかけあって，不思議な味いになっている。

つぎに，説教について考えてみる。Father Mapple の，いわゆるふた撚りの説教（a two stranded lesson）が問題になっている。これは，前章で，つな梯子に使われた二本の撚りづなとして表象されていたことの内容にあたる。Father Mapple は，ヨナ書を stranded であるという。

> Shipmates, this book, containing only four chapters—four yarns—is one of the smallest strands in the mighty cable of the Scriptures. Yet what depths of the soul does Jonah's deep sea-line sound! what a pregnant lesson to us is this prophet! What a noble thing is that in the fish's belly! How billow-like and boisterously grand! We feel the floods surging over us; we sound with him to the kelpy bottom of the waters! Sea weed and all the slime of the sea is about us! But what is this lesson that the book of Jonah teaches? Shipmates, it is a two stranded lesson; a lesson to us all as sinful men, and a lesson to me as a pilot of the living God. (p. 72～3)

まず，Father Mapple によると，ヨナ書は4章からなる。つまり四つの物語（yarn）からなる。yarn には，航海者のつくり話，糸，などの意がある。聖書全体を1本の太い索（cable）とすれば，ヨナ書は，その索を構成する小さな strand になる。strand が撚り糸を意味するとすれば，1本の strand をつくるには，最小限2本の yarn が必要である。ヨナ書は，4本の yarn を2本づつ撚り合せて作った1本の strand であることになる。Father Mapple は，ヨナ書を one of the smallest strands であるという。彼はまた，ヨナ書を a two-stranded lesson であるというが，このことから Father Mapple の，ヨナ書についての説教には，2本の撚り糸のたとえとでも呼ぶべきものがかくされているのが感じとれるし，事実そうなっている。それは，つぎの理由による。

strand には，さらに，浜辺に打ち上げられる，座礁させる，立往生させる，取り残す，などの意がある。鯨が Jonah を岸辺に吐き出すのは，strand である。strand には，撚り糸，と，岸に打ち上げる，の二つの意が撚り合せられている。上の文には，Shipmates よ，と二度呼びかけがある。このような呼びかけがふくまれている文は，この作品の中では，かならず重要な意味がからめられている。What a pregnant lesson は，leaving him（＝Father Mapple）impregnable in his little Quebec（p. 68）と対照。海底で泥や海

草がからみつき，は，Jonah がそういう状態から岸へ strand されたことの寓意と，やはり考えられることは，Pequad 号が，海底深く沈んだ状態から，精神的な，霊的な意味の，New Bedfod の花咲き樹木茂る岸辺へ，打ち上げられる可能性がある，こともからませて（strand させて）いる。第一の教訓は，罪びととしてすべての人にたいする教訓，第二は，生ける神の水先案内人としての Father Mapple にたいしての教訓であると，Facter Mapple はいう。Father Mapple は，教会の会衆の牧羊者としての立場ばかりでなく，予言者としての働きもしているようにおもわれる。

Jonah が逃げて行こうとした Cadiz は Spain にある，と Father Mapple はいう。ところで，Spain については，*Extracts* で，つぎのようにかかれている。

"Spain——a great whale stranded on the shores of Europe.

Edmund Burke, (*somewhere.*)

つまり Spain とは，Europe の岸辺に打ち上げられた巨鯨である。出典不明，とあるのは，おそらくこの章句が，Melville によって作られたものだからだろう。Edmund Burke が実際にそう云ったかどうかは，あまり意味がない。神，ヨナを飲ましめるために大いなる鯨をそなえたまえり，の語句に注意をせよ，と Father Mapple はいう（p. 67)。Jonah は，当時考えられる世界の果の Spain まで神の手から逃れようとして，期せずして，Spain という巨鯨にむかってとびこんで行こうとしたことになる。ここには，神のみ手からは逃れられない，という寓意があると同時に，また，神の言葉にそむく，とは，巨鯨の胎内に落ちるのを意味する，ということにもなる。まことに表象のはっきりした寓意である。このことからも，stranded lesson には，糸が撚りあわせられたように，意味がからみあっていることがわかる。これにかぎらず，この作品のことばの一つ一つに，複数の意味や表象が，切り離しがたくからみ合っている。Jonah の教訓で強調されていることの根本は，神の命令は人間の意志に反するという点にある。Jonah が，巨鯨つまり破滅から逃れるつもりで，巨鯨にむかって近づいていた，というところにパラドックスがある。Jonah が巨鯨にのまれるのは，Jonah の罪が招いた破滅を意味するが，同時に，その巨鯨が Jonah の罪の救済の手段を準備することになる。神の命令が人の安楽に逆らうもののごとく見える不可解さが，つまづきの石となるようである。神の命令が人の平安に逆らうように見えて，じっさいは，もっとも人の平安をはかるものであることに気づかねばならない。神の計画が人知を越えた深い配慮にもとずくものであることが，Jonah が逃げようとして，じつは，それに近づいていたという巨鯨の寓意に示されている。それなら Ahab の行為のあの愚かしさも，愚しいと批判することが，批判するものにとってつまずきの石になっているかもしれない。Ahab の選択は，深い配慮によるかもしれないのである。

... the command of God ... which he found a hard command. But all the things that God would have us to do are hard for to do—remember that—

and hence, he oftener commands us than endeavours to persuade. And if we obey God, we must disobey ourselves; and it is in this disobeying ourselves, wherein the hardness of obeying God consists. (p. 72)

この文には，神に従うことのむつかしさがのべられている。hard command/hard for us to do/hardness of obeying など，また人の心のかたくなさを hard-heartedness など，この hard は第7章 '*The Chapel*' の Captain Hardy (p. 64) の名の延長上にある変化技法である。hardy winter (p. 67) や，船の hardy helm (p. 69) も Captain Ezekiel Hardy に，それぞれ hardy が共通している。

この文では，神は，人を説得しようとはされず，命令される，とのべられている。このことが，神に従うことの第一のむつかしさである。第二のむつかしさとは，人は，神に従うためには，自分にさからわなければならない。このことは，Ahab をはじめ Pequad 号の船乗りたちの行為を考える上で考慮に入れられなければならない。Ahab は自由意志によって白鯨を追っているとはいえなくなる可能性があるからである。Ahab が見えない力によって動かされているとおもわれる点は多々ある。この作品の一つの特色であるが，見えない力によって物語の進行が大きく動かされている。たとえば，Ahab が Cape Horn 沖で発作を起こし，せん妄状態になり，それ以後性格がかわったようになるなど，また Ahab のひたいのいなづま形の烙印，つなにからまった Ahab の最後，その他，表面上は，遇然の事件のようにみえて，よくみると，たくみに仕組まれた見えない糸による伏線と必然性，そういったものが，作品の人物たちの自由意志をこえて，物語の進行と出来事を動かしていることに気づく。そのことが，Father Mapple の説教で明らかにされているようにおもわれる。Fatber Mapple の説教は，Ishmael が伏せて語っていない部分，あるいは，Ishmael が語っているが足らない部分，を大いに補って，この作品の動機と目的を説明しているようにおもわれる。

Father Mapple のふた撚りの教訓とは，二つの教訓が一つの寓話の中に分ちがたく撚りあわされているのだといえる。第1の教訓は，*Sermon* の中の詩にみられるように，悔い改めればすべての人に救いが用意されているという万人のための教訓である。これが，第1の撚り糸である。

Shipmates, I do not place Jonah before you to be copied for his sin but I do place him before you as a model for repentance. Sin not; but if you do, take heed to repent of it like Jonah. (p. 78)

虚心に罪を認め，神に全面的に身をゆだねること，これがもっとも肝要である，と Father Mapple はいう。ヨナが救われるまでに経験したことを見てみよう。ヨナは，船長の質問によって，切り刻まれるおもいがする。'who's there?' Oh! how that harmless question mangles Jonah! (p. 74) mangles は，鯨の皮脂が切り刻まれるの意をおもわせ

る。he darts a scrutinizing glance. (p. 74) や Ha! Jonah, that's another stab. (p. 74) も，銛による突き，の意が掛けられている。ヨブは船賃を払うが，Father Mapple は，このことに注意をうながす。Ishmael は，再三，金銭を支払われることの意義を重視するが，おそらく，支払うことと支払われることの違いを，象徴的に解釈して，現世での徳や罪の貸借関係をなぞらえたものとおもわれる。

> For it is particularly written, shipmates, as if it were a thing not to be overlooked in this history, 'that he paid the fare there of' ere the craft did sail. And taken with the context, this is full of meaning. (p. 74)

ヨナは船室に案内を乞うときに，'Point out my state-room, Sir'. (p. 74) と船長にいう。これには，ヨナのそのときの魂の状態を指摘してほしいの意がある。

> (Jonah) finds the little state-room ceiling almost resting on his forehead. The air is close, and Jonah gasps. Then, in that contracted hole, sunk, too, beneath the ship's water-line, Jonah feels the heralding presentiment of that stifling hour, when the whale shall hold him in the smallest of his bowel's wards. (p. 75)

この状況は，Father Mapple がいうとうり，ヨナが鯨にのまれたときの状況のさきがけである。ヨナは，同じ状況を二度経験することになる。一撚りの索は，すくなくとも二本の糸が撚り合せられたものであるから，最初の一撚りの教訓のうち，それを構成する二本の糸とは，ヨナが経験する船内での息づまるおもいと，鯨の体内での息苦しさとを，さすことになる。また船内での失神と目覚めも，鯨の体内での死の経験と，そこから救出されるときのための予備体験となっている。同じ経験が重複している。それらが，二本の糸であると考えられる。ヨナは船内で，死の通過儀式といえるものを経験する。

> Like one who after a night of drunken revelry hies to his bed, still reeking but with conscience yet pricking him,... as one who in that miserable plight still turns and turns in giddy anguish, praying God for annihilation until the fit be passed; and at last amid the whirl of woe he feels, a deep stupor steals over him, as over the man who bleeds to death, for conscience is the wound, and there's naught to staunch it; so, after sore wrestlings in his berth, Jonah's prodigy of ponderous misery drags him drowning down to sleep. (p. 75)

「一晩中酔いどれて放蕩した男が寝床に急ぐように，まだめまいしながら，そのくせ良心は，その心を突き刺した。そのみじめな境涯の中からますます狂おしく悶えながら，この狂乱が消え去るまでは死をも給えと神に祈った。そして最後には悲嘆の渦の中で，出血して死ぬときのような深い喪心の状態がおそってくる，というのは，良心は傷であり，その出血を止めるものは世にないからだ。こうしてヨナは，寝床で痛ましくもがいたあげく

に,重々しい悲惨の心の大きさによろめいて,滅入りこむように眠りに引きずられていく。」ヨナが船室で眠りこんでしまうさまが，銛による傷で死んでいくかにたとえられている。pricking him／as over the man who bleeds to death／there's naught to staunch it Jonah's prodigy of ponderous misery drags him drowning down to sleep は，死にゆく鯨の姿である。still reeling／conscience is the wound もそうである。drags him drowning down to him は，Melvetle の詩の第1連の lift (=left) me deepening down to doom と同じ韻律になっている。Screwed at its axis against the side (p. 75) は，脇腹に軸のつけ根まで銛を打ちこまれて，の意がある。これらの暗喩から，ヨナの良心と，鯨と，そしてキリストの受難像が，たがいに重複しあって，一つの像として浮かび上ってくる。船内の昏睡は，鯨の体内での経験のための水先案内の役を果たしている。ヨナが魂の安心立命を得るためには，彼は，良心の傷を負って一度死ななければならない。

つぎの文も，ヨナの魂の状態を示している。

> O sleeper! arise! Startled from his lethargy by that direful cry, Jonah staggers to his feet, and stumbling to deck, grasps the shroud, to look out upon the sea. But at that moment he is sprung upon by a panther billow leaping over the bulwarks. Wave after wave thus leaps into the ship, and finding no speedy vent runs roaring fore and aft, (p. 76)

起きよ，眠れる者よ，と声をかけられて，ヨナは，よろめきながら甲板に上ってくる。舷側を跳び越えて豹のような波がヨブのもとに跳びこんで，波は，逃げ場を失ったかのように，甲板の上を咆えながら駆けまわる。ヨナの魂の状態は，囲いの中の荒々しい動物にたとえられている。

魂が絶望の状態にあるとき，そこには救いの可能性が準備されている。つぎの文がそのことを示している。

> And ever, as the white moon shows her affrighted face from the steep gullies in the blackness overhead, aghast Jonah sees the rearing bowsprit pointing high upward, but soon beat downward again towards the tormented deep. (p. 76)

「月が頭上の真黒の深淵から恐れのために蒼ざめた顔をのぞかせたとき，ヨナは戦いてしまった。というのは，第1斜檣が頭をもたげて高く天を指したかとおもうと，たちまち喚き狂う海面をのたうちまわるのを見たからだ。」頭上の真黒な深淵，steep gullies in the blackness overhead，の，gullies は，岩壁にできた岩溝，の意である。これは，頭上の真黒な，切り立った岩壁にできた裂け目から，白い月が，おそらく満月の，丸い顔をのぞかせることになる。おそらく，台風が渦まいて，その中心の澄みきった円形の夜空から月が見える現象がヨナをとりまいているのだろう。岩壁と白い骨の象徴については，すでに見てきた。これらは，New Bedford という語が象徴するような，岩場，魂がその住居を築く

ための新しい土台，である。けわしい岩の壁を破って白い顔が輝き出る，これは，いうまでもなく，Lazarus の復活のイメージであり，ヨナにも，死を通過したあとの復活が予示されていることになる。Ahab が，死という壁のむこうにあるかもしれない，と期待したのは，このような復活の可能性であろう。同時に Ahab は，なにもないかもしれない，と疑念ももっている。O Sleeper! Arise! これも，キリストが Lazarus に云われた言葉に対応している。真黒な岩壁にできた岩溝，これが，渦巻く台風の中心の眼であることは，すでにのべた。ヨナは今，目を覚まし，彼自身の魂の状態をまのあたりに見た。これが，彼が船長に，Point out my state-room，といったために見せられた彼の魂の奥に眠る風景である。ヨナが船室で眠って気づかぬうちに，鯨が，岩の壁に溝がつくられるのと同じように，水を切り裂いて，口を開けて進んでくるのが，神によって用意されている。

> ...little hears he or heeds he the far rush of the mighty whale, which even now with open mouth is cleaving the seas after him. (p. 76)

cleaving には，まっぷたつに割る，裂く，押し分けて進む，などの意がある。復活の予示は，ヨナと Pequad 号の乗組員に当てはめることができるばかりでない。この構図は，すべての人に当てはまる復活の可能性の予示である，と Father Mapple は説く。ヨナが渦巻く泡の中に落ち，鯨にのまれて海の底深く沈んでいく，ここまでが，二撚りの教訓のうち，第1の撚り糸の教訓である。第1の撚り糸は，上から下の方向に落ちる動きをあらわす。

第2の撚り糸は，下から上の方向に登っていく動きを示す。'*The Sermon*' の詩の中にも，上下二方向に垂直の動きが見られるが，それが，上下二本の二撚りの索というべきものである。2本の撚り糸が分かちがたく撚り合せられている。ヨナが渦巻きながら落ちていく，このきりもみ運動も糸を撚り合せていく動作にたとえられている。

Father Mapple の説では，下降と上昇が渦巻運動をともなって繰りひろげられる。

> As we have seen, God came upon him in the whale, and swallows him down to living gulfs of doom, and with swift slantings tore him down along 'into the midst of the seas', where the eddying depths sucked him ten thousand fathoms down, and 'the weeds were wrapped about his head', and all the watery world of woe bowled over him. Yet even then beyond the reach of any plummet—'out of the belly of hell'—when the whale grounded upon the ocean's utmost bones, even then, God heard the engulphed, repenting prophet when he cried. Then God spake unto the fish; and from the shuddering cold and blackness of the sea, the whale came breeching up towards the warm and pleasant sun, and all the delights of air and earth; and vomited out Jonah upon the dry land; (p. 79)

渦巻く水は千尋の底に彼を引きずりこみ，しかもそのような鉛錘もとどかぬところ，海のどん底まで鯨が沈んでしまったときにも，神は悔いている予言者の叫びをきかれた。そのため鯨は冷たく暗い海底から尾を巻きつつ，暖かく明るい大気と大地の喜びにみちたところまで昇ってきて，ヨナを吐き出した。下から上へ昇る，これが第2の撚り糸である。海のどん底（living gulfs of doom／midst of the seas／eddying depth sucked him／ten thousand fathoms down／watery world of woe bowled over him／beyond the reach of any plummet／out of the belly of hell／whale grounded upon the ocean's utmost depth）を強調する語句がこれだけ使われている。このようなどん底から太陽の輝く大気と大地の上に吐き出される，つまり，岸辺に打ち上げられ strand される。見えない撚り糸によって底まで引きずり降ろされ，ふたたび上まで引き上げられる。その落差の大きさが，Delight の大きさを示す。この撚り糸の比喩には，渦巻き運動がともなう。eddying depth sucked him，これは下降のときである。the whale came breeching up，これは上昇のときである。breeching は鯨が尾をくるくる巻きながら，の意である。下から上に昇っていく撚り糸の示す歓び，これが Father Mapple の説く究極の目的である。Father Mapple は，説教壇へ二本の撚りづなをたぐりながら昇っていく。彼は，無言の行為と表象によっても，彼の説教の主旨を明らかにしている。説教壇のこのような海洋趣味について Ishmael は，これ以上意味深長なものが他にあろうか（what could be more full of meaning？(p. 69)）という。

第1の撚り糸の教訓は，神にたいして自身の非を認めようとせず，慈悲を乞わないことであった。ヨブは，海のどん底で祈る。つぎに，第2の撚り糸の教訓は，虚偽にむかって真実を説くことである。

> Jonah did the Almighty's bidding. And what was that, shipmates? To preach the truth to the face of Falsehood! That's it! (p. 79)

第1の撚り糸は，嘆きの祈りを，第2の撚り糸は，いと高き堅固な砦の上で歓びの頌歌を，それぞれ述べている。2本の撚り糸は，たがいに密接につながっている。Father Mapple は，これを2本の撚り糸から成る一つの教訓（a two-stranded lesson）と呼ぶ。ヨナが陸地に吐き出される，これが第1の strand である。第2の strand は，内面の New Bedford に打ち上げられ，不滅の花を咲かせることである。

Father Mapple の中に予言者の要素を認めることができる。Father Mapple は，ヨナの経験をわが身に体現して感じとろうとする。ヨナの苦悩と歓びをわがものとして受けとめようとする。これは，ヨナを第三者としてみている姿勢ではない。Father Mapple は，ヨナになりかわろうとしているかにみえる。Father Mapple は，彼自身の内なる光に照らして，彼自身の心の中からヨナを引き出してこようとしているかにおもえる。Father Mapple は，たんなる説教者というより，内なる光に導かれてヨナを語る予言者のようにすら

みえる。Father Mapple は，あまりにもヨナと同一化しようとして，自己をむなしくするので，説教壇で語るのは，もはや Father Mapple ではなく，ヨナ自身であるかのようである。つぎの文から，そのことがうかがえる。

> He paused a little! then kneeling in the pulpit's bows, folded his large brown hands across his chest, uplifted his closed eyes, and offered a prayer so deeply devout that he seemed kneeling and praying at the bottom of the sea.
>
> This ended, in prolonged solemn tones, like the continual tolling of a bell in a ship that is foundering at sea in a fog—in such tones he commenced reading the following hymn; but changing his manner towards the concluding stanzas, burst forth with a pealing exultation and joy—(p. 70)

これは，説教のまえの祈りから始まって，頌歌を読み上げる Father Mapple の姿をのべたものである。

つぎの文は，説教の第一段階を終えて第二段階に入るまえの Father Mapple の姿を示している。つぎの文も，Father Mapple が霊的になにかと交感しているようにみえる。

> While he was speaking these words, the howling of the shrieking, slanting storm without seemed to add new power to the preacher, who, when describing Jonah's sea-storm, seemed tossed by a storm himself. His deep chest heaved as with a ground swell; his tossed arms seemed the warring elements at work; and the thunders that rolled away from off his swarthy brow, and the light leaping from his eye, made all his simple hearers look on him with a quick fear that was strange to them.
>
> There now came a lull in his look, as he silently turned over the leaves of the Book once more; and, at last, standing motionless, with closed eyes, for the moment, seemed communing with God and himself. (p. 78)

つぎの文は，説教が終ったあとの Father Mapple の姿を示している。

> He said no more, but slowly waving a benediction, covered his face with his hands, and so remained kneeling, till all the people had departed, and he was left alone in the place. (p. 81)

はじめの引用文では，Father Mapple は，彼の読み上げる頌歌の内容そのものになりきってしまっている。彼は，海底にいるかのように，ひざまづき，眼を閉じて祈りはじめる。彼は忘我の陶酔状態に入っていくようにみえる。彼は，霧の中をただよう船がたえまなく鳴らすとむらいの鐘のような声で読みはじめ，終りに近づくと，轟く鐘のような，感きわまった歓びの声，pealing exultation and joy，で朗読を結ぶ。海底で祈る姿，歓喜のきわみ，これは，ヨナそのものである。Father Mapple はヨナになりかわってしまう。説教の第二

段階に入るときの，Father Mapple は，彼の眼からは稲妻が走り，light leaping from his eye，会衆も驚き怪しむほど，made all his simple hearers look on him with a quick fear that was strange to them，である。激しさが収まると，じっと眼を閉じたまま立ちつくし，神と交感しているようにみえる，standing motionless, with closed eyes,...seemed communing with God and himself.。彼は，クエーカー教徒が内なる光に導かれて異言を伝えているときのようにみえる。Father Mapple は，見えない力に導かれて語っているようにみえる。説教を語りおえたときも，彼は，ふつうの神父のようではない。放心したように，じっと説教壇にひざまづいたままである。交霊のおわったあとの放心状態のようである。会衆をねぎらい，親しく語ることをしない。会堂に入ってきたときもそうであるが，こういったことも慣習からはずれている。Father Mapple は，神父というよりも，ヨナが神父の肉体をかりているかのようにみえる。Pequad 号の船主たちはクエーカー教徒であるが，クエーカー教徒の間では，こういった現象は，日常的に起りうる。Father Mapple は，予言者のヨナとしての identity をもっている。ここでは，新しい意味をもってヨナの物語の次第と予言が示されているとおもわれる。*Moby-Dick* の物語と密接に関係があるものとして，ヨナの寓話が挿入されているにちがいない。予言者としてのヨナ，そしてその予言の内容，これが，Father Mapple のいう二撚りの教訓のうち，第二の撚り糸のかなめとなっている。

ヨナの予言は，To preach the Truth to the face of Falsehood (p. 79) である。Father Mapple によれば，"This, shipmates, this is that other lesson ; (p. 79) である。この言葉は，ありふれているようにみえるが，そうではない。この言葉が Ahab の行動を説明しているからである。Ahab の行為は，正気の沙汰にはみえない。徹頭徹尾，常軌をはずしているようにみえる。しかし超絶主義の精神風土を継いでいるといわれる同時代の，Dickinson のつぎの詩は，ヨナの予言との関連において，Ahab に当てはまるだろう。

Much Madness is divinest Sense—
To a discerning Eye—
Much Sense—the starkest Madness—
'Tis the Majority
In this, as All, prevail—
Assent—and you are sane—
Demur—and you're straightway dangerous—
And handled with a chain—(poem 435)

Sane をTruth に，Madness を Falsehood に置きかえてみるとどうだろう。世俗の逸楽は，妻子とともに過す炉辺の逸楽といえども，視点をかえれば，すべて虚偽であるかもしれない。すくなくともキリストの生涯にならえば，それにそぐわない世俗の生活は，虚

偽であるかもしれない。現世の生は，不滅の生命を得るための手段として使われるのがその存在意義であるとすれば，途上の逸楽に眩惑されて，もっと高次の歓びがあるかもしれないことに気づかなければ，また気づこうともしなければ，それは，虚偽の生活ということになる。聖書が，徹底して永遠の生命が存在することの可能性について語りつづけているのを，まったく無視し否定してしまうのは，虚偽であることになる。神が自然の現象を通じて，さまざまな signs や hints (p. 84) をその言語として，生命の不滅の可能性について，またそれを得る方法について，語りかけておられるかもしれないのである。超絶主義とは，人間の言語を超越して，大自然の言語である signs や hints を，内なる光である直観によって解読し，その奥にある神の意図と恩寵を理解することであった。自然の語る言語を理解すること，これが超絶主義の精神である。自然の言語を理解する方法は，人の内なる大霊と外に遍満する大霊とが合一 (commune) することである。Quaker 教徒が神から伝達を受けとる方法はこれである。Mapple 神父は，すでにみてきたように，神と交霊する，seemed to commune with God and himself (p. 79)，かのようにみえた。Ishmael も，'*Loomings*' の章でみてきたように，自然の伝える気配を敏感に感じとって，彼が超絶主義者であることを示していた。Ahab も，自然が彼に伝える徴(しるし)や暗示に忠実に反応し，彼自身の現世の幸福を求めたい気持にそむいて，彼が感じ取った自然からの命令に従う。彼は，自然がその内奥から伝える命令と計画を確実にとらえ，実行する。Ahab は，自然を動かしておられる神の意志を真実とみなし，妻子のもとに魅かれる彼自身の情を，迷いや虚偽であるとみる。Father Mapple も，Ishmael も Ahab も Quequeg もその他の Pequad 号上の人々は，すべて峻敏な超絶主義者たちである。Father Mapple の第二の教訓は，ヨナがニネベの人々に伝えるようにと命ぜられた予言よりさらに深い意味をもち，超絶主義の性格を帯びたものであり，Melville がつくりかえてしまったものである。虚偽にむかって真実を説く，これが *Moby-Dick* を貫く精神であり，Ahab の行為を説明するものである。Ahab の行為は，あまりにも純粋で妥協の予地がないので，正気とは見えないが，本来，真実と虚偽のあいだには妥協などありえない。もし人が安易に，そのような妥協がありうると考えるなら，その人は，Ahab の真意を理解できないだろう。Ahab は，キリストにならって，いわば十字架上の死を目指している。Melvill は，'*Cetology*' の章で，鯨は魚であると云いはるが，それは，魚がキリストの象徴であるとみなされているためであるが，いわば，白鯨という両義性の十字架を背負って，Ahab は，白鯨という通路をとおって，彼岸の世界へ行こうとしたのであろう。白鯨は，ばあいによっては，*Town-Ho's Story*' の章で Radney を連れ去ったように，不滅とは正反対の世界へ通じる通路にもなりうる。Ahab は，彼のような克己の身にとっては，白鯨が，キリストの象徴，不滅への通路となりうるとみなしている。

それでは，Ahab が白鯨を不倶戴天の仇とみなしているのは，なぜか。それは，鯨のも

つ二律背反性による。ヨナを死の奈落に引きずりこむとき，鯨はヨナにとって仇となる。その同じ鯨が，ヨナの救いとなり歓びとなる。鯨を仇とみなすか救いとみなすかは，見る角度によるものである。下降をもたらすものと見なすとき，鯨は仇となるのである。しかし上昇をもたらすためには，上昇にさきだって下降がなければならない。下降とは，人がみずからの罪とともに死ぬことである。下降のとき鯨は人の罪の象徴となる。このとき白鯨は，Ahab 自身の罪の象徴になる。Ahab が白鯨とともにもっとも奥深い海底まで降下するとき，彼は彼自身の罪とともに死ぬことになる。仇とは，彼自身の罪のことである。下降ののちには，ヨナの第一の教訓が告げているとうりであれば，恩寵による上昇が待っていることになる。Father Mapple は，神は生きておられ，彼はその神の水先案内人 the pilot of the living God (p. 72, 73, 82) であるという。それならヨナ記に語られているヨナの奇跡と予言は，たんなる寓話ではなく，Ahab に当てはまる生きた真実であることになる。Ahab は，白鯨が彼にとって仇であることについては語っているが，白鯨が彼にとって救いとなる可能性については沈黙している。Ahabは，白鯨の追跡の直前になって，彼がその可能性について全面的に確信しているわけではないと告白するが，結局彼はその可能性を試みることになる。Melville の手法は，説明と沈黙とあい半ばする。しかし沈黙した部分については，きわめて細微にわたる signs and hints による説明が付けられているので，Melville が沈黙した部分については，彼が考えあぐねているとか，論理の不一致があるなどということではけっしてない。

つぎの文は，鯨のもつ二面性のうち，暗黒面をあらわす。暗黒から光輝へ，これがヨナの寓意であり，Father Mapple の説教の主題であるが，ヨナの転落と栄光がそのままAhab と Pequod 号の船員たちに本質的に当てはまりうると暗示されているところに，この説教の特色があるといえる。Father Mapple の説教の主旨は，彼が読み上げる讃歌の中に要約されていて，それは，顎(あぎと)の恐ろしさと彼岸の浜に打ち上げられる歓びである。

> He goes down in the whirling heart of such a masterless commotion that he scarce heeds the moment when he drops seething into the yawning jaws awaiting him ; and the whale shoots-to all his ivory teeth, like so many white bolts, upon his prison (p. 77)

この文の，死の恐ろしさと救出される歓び，は，あざなわれるつなのように，たがいに分かちがたく結ばれており，Ahab 一行がそうしたように，一度奈落に沈まなければ栄光がない，というところに Father Mapple の説く神の計画の苛酷さがある。暗黒と光輝が，ある意味では，表裏一体であるところに，*Moby-Dick* の不可解さがある。また Ahab が，白鯨のもつ暗黒面についてのみ語り，光輝については沈黙したままであるところに *Moby-Dick* の解釈のむつかしさがある。しかし Father Mapple が，讃歌と説教の中で，Ahab が沈黙した部分を十分明らかにしている，と考えてさしつかえないだろう。Ahab の死そ

のものが彼の復活を保証するものであることになる。Ahab の死を招いた白鯨が Ahab の復活を導くものであることになる。Ahab の栄光の期待を Melville がかくしたままにして語っていないところに，ある意味では，Melville の近代人としての懐疑の深さを読みとるべきかもしれない。岩の不毛を樹木の花実のための豊穣の前提であると信じなければならないところに，神学の論理の苛酷さがある。そのことを Ishmael は，impregnable in his (Father Mapple) little Quebec (p. 68) と What a pregnable lesson to us is this prophet！(p. 72) といって，不毛と豊穣を対照させている。不毛を通過しなければ豊穣がありえないところに，*Moby-Dick* の作品解釈の微妙さがあるといえる。

この章には，不完全ながらも十字架の表象がかくされている。死と復活の原点に，十字架の垂直方向の梁(ハリ)の象徴がある，とむしろ云うべきだろう。天からもっとも深い海底まで垂直に下ろされた二撚りのつなの象徴から，容易にその意味をうかがい知ることができるだろう。云うまでもなく，船の帆柱は，十字架の象徴である。つぎの文は，ヨナの魂の状態をあらわしているとも云えるだろうが，十字架が象徴するところのものを樹立しようと努めて，できえないでいる状態をあらわしている。

> ...aghast Jonah sees the rearing bowsprit pointing high upward, but soon beat downward again towards the tormented deep. (p. 76)

このばあいは，帆柱ではなく，斜めに突き出た斜檣 (bowsprit) が，捧立ちに (rearing) になって，高く天を指しそびえたったかとおもうと，たちまち喚き叫ぶ海面をのたうちまわる。斜檣は，下から天にむかって差し出す手のようなものである。ヨナが乗っていた船の水夫たちは，ヨナを錨のように海に投げこむとき，片腕はヨナをつかみ，片腕は神に嘆願するように高く差し上げる。これらの腕と斜檣は，いずれも，救いを求める魂の象徴である。

> ...with one hand raised invokingly to God, with the other they not unreluctantly lay hold of Jonah.
>
> "And now behold Jonah taken up as an anchor and dropped into the sea; (p. 77)

錨のように沈んでいくヨナと水夫たちの高く上げた片腕は，この章のテーマである撚り糸の喩えの中に，天へ向って下から上へ上昇を求める願望がふくまれていることを示している。高く上げた片腕は，十字架の，十字形の縦の線を形どるものである。*Moby-Dick* 全体をとうして，十字形と，XY軸のようなその交点が，重要な意味をもち，さまざまなイメージがヴァリエイションを重ねながら，たえず十字架の象徴が示されていることに気づく。人が高く差しのばした腕に答えて，神も天から人に腕を差し出す。神の手が人に触れるとき，なんらかの秘跡が起こり，救いが準備されることになる。神のみ手がヨナに置かれたためにヨナは，求められずして，つぎのように答える。

> ... the unsolicited answer is forced from Jonah by the hard hand of God that is upon him. …he (Jonah) cries—'I fear the Lord the God of Heaven who has made the sea and the dry land!' (p. 77)

ヨナは，海と陸をお創りになられた神を恐れる，と答えたのち，ヨナは黙し，全面的に神の威力を認める。そこからヨナの前に道が開けることになる。Father Mapple は，神はすべての人の上に片手を置いておられる，と言う。しかし神は Father Mapple の上には両手を置いておられる，と言う。

> "Shipmates, God has laid one hand upon you; both his hands press upon me. (p. 78)

Father Mapple は，選ばれて深い恩寵と使命を授かっていると感じる。それは，ヨナと同様予言者としての任務であり，ヨナが恐れて逃げ出すほどの重くきびしいものである。Fathe Mapple は，おぼろげながらも彼の内なる光に照らしてヨナの寓話の第一の撚り糸の教訓を述べた，という。内なる光に照らして，は，彼がクエーカー教徒であり超絶主義者であることを示している。

> I have read ye by what murky light may be mine the lesson that Jonah teaches to all sinners; and therefore to ye, and still more to me, for I am a greater sinner than ye.

Father Mapple は，会衆よりも彼自身の方が罪深いという。それはなぜか。会衆の女たちは島のように孤立した悲しみを背負い，死の何たるかを身近かに知っている。Father Mapple は，生きて負い目を感じているのかもしれない。Father Mapple は，第二の撚り糸の教訓は，第一のものよりもっと恐ろしい，という。第一の教訓ですら恐ろしいのであるにもかかわらずである。Father Mapple は，第二の撚り糸の教訓をのべ伝える任務を取りのぞけるものなら取りのぞいてほしいと言う。彼自身が語るよりも他の人によって語られるのを聞く立場の方をむしろ望む，と彼はいう。

> And now how gladly would I come down…while some one of you reads me that other and more awfel lesson (p. 79)

その恐ろしさの一つは，世人の反撥を買うであろうというおそれである。ヨナ記では，ヨナはこのようなおそれを抱いていなかった。第二の撚り糸の教訓は，ヨナ記になかったものを Melville が書き加えたものである。第二の撚り糸の教訓は，*Moby-Dick* の精神をあきらかにするためであろうが，また，復活したヨナの魂が，Father Mapple の身体を借りて，ヨナの罪がどれほど恐ろしいものであるかを悟って，それを述べているかのようである。

> How being an anointed pilot-prophet, or speaker of true things, and bidden by the Lord to sound those unwelcome truths in the ears of a wicked Nineveh, Jonah, appalled at the hostility he should raise, fled from his mission, and

sought to escape his duty. (p. 79)

ヨナ記では，Nineveh の人々は素直な，善良な人々であって，wicked ではない。Melville は，Ahab を理解できない人々を wicked Nineveh と呼んでいるのかもしれない。世人の耳に歓迎されない真実を聖別された水先案内人である予言者が語ると引き起こすはずの反撥を予想してヨナは蒼ざめる。

第二の撚り糸の教訓にふくまれる，第二の恐ろしさは，きびしい真実を世人に伝えるばかりでなく，伝える人みずからが，そのきびしい真実を実行しなければならないところにある。

> "This, shipmates, this is that other lesson; and woe to that pilot of the living God who slights it. Woe to him whom this world charms from Gospel duty! Woe to him who seeks to pour oil upon the waters when God has brewed them into a gale! Woe to him who seeks to please rather than to appal! Woe to him whose good name is more to him than goodness! Woe to him who would not be true, even though to be false were salvation! Yea, woe to him who, as the great Pilot Paul has it, while preaching to others is himself a castaway!" (p. 79—80)

この文の内容は，'*Leeshore*' で説かれているものと同じである。それは，現世の歓びにひたってはならない，につきる。永遠の歓びは，現世の歓びを捨てるところから始まり，永遠の歓びは現世の歓びとまったく相反することになる。真実と虚偽のあいだに妥協の余地がありえないように，永遠の歓びと現世のよろこびとのあいだには，まったく妥協がありえないことになる。これを認識しこれを実践しなければならないところに，第二の撚り糸にふくまれている第二の，恐ろしさ，がある。この世にあって恥辱を求める勇気のないものはわざわいである，嘘われば救われるばあいにも真実を述べる勇気のないもの，他の人を教えてみずからは捨てられるものは，わざわいである，と Father Mapple は説く。このことが Ahab を理解するための鍵となる。Ahab は彼自身の行為を説明しない。しかし Father Mapple が説いて，実行せよ，とすすめたことを Ahab が実行していることになる。Father Mapple が説く，歓び，は，現世を捨てなければ得ることができない。その歓びは，死の衣をまとっており，死の中に存在するからである。ヨナの第一の撚り糸の教訓の，恐ろしさ，は，みずからの罪のために招いたものとはいえ，ヨナが受動的に死の中に投げこまれたことであったが，第二の撚り糸の教訓の，恐ろしさ，は，みずからの意志によって死の中にとびこんで行かねばならないところにある。

Father Mapple の説く教訓のきびしさについて考えてみる。このきびしさは，いわゆる清教徒が他者に対してきびしかったあの不寛容さとは，いくぶん違っている。Father Mapple の説くきびしさは，他者に対してよりもみずからに対する方に大きく比重がかか

っている。Father Mapple のきびしさは，現世を捨てること，これを実行しなければならないこと，である。これは，当時の清教徒の考え方とは，いくぶん，違っている。Father Mapple の考え方は，神と自己との一対一の関係を重視しており，自己と対他者との関係は，虚偽にむかって真実を説くのみで，他者に行動を強要しているようにおもえない。むしろ自己に行動を強要しており，他者に対しては選択をまかせているといった感がある。清教徒の考え方では，自己を神の道具（instrument of God; Feidelson p. 81）とみているが，Father Mapple の説いているのは，盲目的な服従ではない。自己を捨てることが，永遠の歓びを得るために不可欠であることの原理を理解し，その上で自己の自由な意志によって，神の計画に従うことを Father Mapple は説いている。したがって，他者に対するきびしさは，第二義的なものになる。Father Mapple の説く Delight，歓喜，法悦，恍惚，は，死の中に存在するのであって，現世には存在しない。その恍惚はまた，Ishmael が '*Loomings*' の章で言及しているが，人が水面を眺めて内面の海を観想して，自己の内面にみいだすべきものである。その恍惚ともいうべき歓びは，死と切り離しがたいので，ある意味では，エロスのそれと重複しあう。Father Mappleは，すさまじい恍惚にゆさぶられ，祝福を与えたのち，死のように沈黙し，そのままじっと両手で顔をおおい，人々がいなくなるまで，ひとりそこに跪まずいていた。一瞬の恍惚と永遠の歓び，両者は結びついて，時は死のように静止する。Fathe Mapple は，激しい憑依が終ったあとのような虚脱の状態をしている。

つぎの文は，Father Mapple の説教の目的の本質であり，Ahab の目的と一致する。これが，下から上に上昇する動きを示す，第二の撚り糸，の比喩の本質である。罪多き現世の船が沈むとき，その船なる肉体の所有者にとっては歓喜がある。これが Ahab の航海の目的であり，動機であると，Father Mapple が説明していると考えてよい。

> He drooped and fell away from himself for a moment; then lifting his face to them again, showed a deep joy in his eyes, as he cried out with a heavenly enthusiasm,—"But oh ! shipmates ! on the starboad hand of every woe, there is a sure delight; and higher the top of that delight, than the bottom of the woe is deep. Is not the main-truck higher than the kelson is low ? Delight is to him—a far, far upward, and inward delight—who against the proud gods and commodores of this earth, ever stands forth his own inexorable self. Delight is to him, when the ship of this base treacherous world has gone down beneath him. Delight is to him, who gives no quarter in the truth, and kills, burns, and destroys all sin though he pluck it out from under the robes of Senators and Judges. Delight,—top-gallant delight is to him, who acknowledges no law or lord, but the Lord his God, and is only a patrioit to heaven.

Delight is to him, whom all the waves of the billows of the seas of the boisterous mob can never shake from this sure Keel of Ages. And eternal delight and deliciousness will be his, who coming to lay him down, can say with his final breath—O Father!—chiefly known to me by Thy rod—mortal or immortal, here I die. I have striven to be Thine, more than to be this world's, or mine own. (p. 80—1)

Father Mapple の眼は深い歓喜に輝き，天上の恍惚の熱情をこめて叫び出す。あらゆる悲痛の右舷には確実な歓びがあり，その歓びの高さは，悲痛の深さよりはるかに大きく，大帆檣の頂きの高さは，内竜骨の底深さよりまさっている，と彼はいう。なぜ歓びが右舷の方向にあるのだろうか。Pequad 号は東に向って風上に進んでいるので，Pequod 号から見て，右舷の方向は，南寄りの東の方向にあるらしいことになる。太陽の昇る方向といった意味だろうか。右舷（starboad）は，星に乗って（on boad star）の意にもなる。the top of that delight と the bottom of the woe は，天の高みと淵の底との無限の距離をつなぐ撚り糸の不可思議について暗に言及しているのだろう。main truck と kelson について考えられることは，'*EXTRACTS*' 第1の部で Melvilleが，哀れな事務助手を慰めて，主檣高くかけ登れ，といっていることと関連している。

But gulp down your tears and hie aloft to the royal-mast with your heart; for your friends who have gone before are clearing our seven-storied heavens, and making refugees of long-pampered Gabriel, Michel, and Raphael, against your coming. Here ye strike unsplinterable glasses! (p. 7—8)

主檣の頂上から内竜骨の底までを天の高みから地の淵の底までになぞらえて，宇宙に対して船を一つの小宇宙にみたて，船に象徴としての意味を与えているのはいうまでもないが，とくに主檣と横桁材で形づくる十字形は，十字架の象徴として，さまざまな形而上の意味がここに含まれている。Melville が，文献を提供した助手に，七層の天界へ主檣を伝って昇りうることを期待せよ，と励ますのは，Father Mapple の撚り糸の比喩と比較して理解されるべきものだろう。七層の天界（seven storied heavens）について Ishmael はしばしば言及する。助手は，現世では不遇の扱いを受けたが，天界では大天使ガブリエルですら退出させるほどの，復活と不滅の栄誉を得るであろう，と Melville は示唆している。*Moby-Dick* に見られる比喩は，終始，徹底して，復活と不滅についてである。

天の高さと陰府の深さ，これについては「ヨブ記」に言及がある。これに限らず *Moby-Dick* は，「ヨブ記」から，多くの比喩と，思索の連鎖を曳いてきている。天よりも高く陰府よりも深い，は「ヨブ記」ではつぎのようになっている。

Canst thou by searching find out God?

Canst thou find out the Almighty unto perfection?

It is as high as heaven; what canst thou do?

deeper than hell; what canst thou know? (Job 11 : 7～9)

あなたは神の深いことを窮めることができるか。

全能者の限界を窮めることができるか。

それは天よりも高い，あなたはなにをなしうるか。

それは陰府よりも深い。あなたはなにを知りうるか。

これらは問いかけの文である。「ヨブ記」には多くの問いかけがある。それらの問いかけは，なんらかのかたちで「ヨブ記」の中で答えが与えられているのである。そういった意味では，「ヨブ記」はある種の黙示文学である。*Moby-Dick* にも多くの問いかけと，秘められたかたちでそれらにたいする答えとがちりばめられている。「ヨブ記」の，神についてなにをなしうるか，なにを知りうるか，という問いにたいして答えるかのようなかたちに Father Mapple の説教はできている。彼は，神の恐しい威力について語ると同時に救いの構図についても示す。彼は，死に臨んで，最後の息とともに，おお父なる神よ，私はあなたをただ笞によってのみ知ったのだが，不滅であれ必滅であれ，私はこの世のものでありおのれのものであるよりも，あなたに捧げようとして生きてきたのであります，と言いうる人にのみ，永遠の歓びと快楽(けらく)がある，という。Father Mapple は，これが，「ヨブ記」で問われている，人はなにをなすことができるか，どのように神を知ることができるか，の答えであり，それが永遠の歓びを得る唯一の方法であるという。神の命令のきびしさと永遠の歓びとは，不可分に撚り合せられていることになる。傲慢なるこの世の神々や提督に刃向いながら，不動の自己を押し立てていく者にこそ，歓びがある，高き高き，そして深い内面の歓びがある，この卑しい嘘多い世の船が沈んでいっても，なおも自己の力強い両腕にみずからを支えている者にこそ，歓びがある，元老や法官の衣のかげからさえも罪を引き出して，殺害し，焼き滅し打ち砕き，真理のためにはなんの容赦もせぬ者にこそ歓びがある，主なる神のほかには何の掟も主人も認めず，ただ天への愛国者である者にこそ歓びがある，そびえる上檣のような歓びがある，荒れ狂う世俗の海洋の波浪の渦巻きがあろうとも，世界を貫く竜骨の堅牢さを信じて動かぬ者にこそ，歓びがあるのだ，と Father Mapple はいう。gives no quarter in the truth, kills, burns and destroys all sin は，清教徒のもつ他者の罪に対するきびしさという対社会的なものとしてより，自己の罪に対するものである。Ahab は，白鯨を諸悪の象徴とみるとき，抹香鯨を切り刻み，焼き滅し，純粋の油だけを採集するという作業を，罪を焼き捨て清純な魂だけを残す，といった象徴としての意味に置きかえている。自己の外部にある白鯨を悪の象徴として追うなら，そのような追跡は，なんの意味ももたなくなる。Ahab の正気が疑われるばかりだが，白鯨を自己の内面の潜在意識の中に住む罪の象徴としてみるなら，これを滅すことは，自己の魂の救済につながることになる。Ahab による白鯨の追跡を，Ahab の内面の劇の

象徴としてみるのでなければ，*Moby-Dick* の意味は半減し，人はこれの解釈にとまどうことになる。また，あの壮絶な終局はなんのためであったのか，まったくわからなくなり，堂々めぐりの出口なしになってしまう。潜在意識という概念を導き入れて，この劇はすべて内面で起ったのだと考えなければ，また Father Mapple の説くヨナの寓話すら，内面の劇として自己の潜在意識中に取り込んでしまうのでなければ，歓びは死の中にあるとわかっても，どこでどのように死ねばよいのか，Ahab の死の意味は何であったのか，まったくわからなくなってしまう。Father Mapple の考え方は，正統なキリスト教徒の考え方である。これと Ishmael や Ahab の考え方も大きくは違わない。たしかに Ishmael や Ahab の考えは異端のように映るが，よく見るとキリスト教神学からはずれているとはおもえない。Father Mapple, Ishmael そして Ahab は，それぞれ同じ考え方をして，同じ座標軸上で一直線に並びうる同一性をもっている。

O Father の O には h がついていない。このばあいの O は，まるで冠の輪のような形をし，まるで敬称として，Father の語の前に付け加えられているかのようにみえる。Melville は，O と Oh とを使いわけている。O は，それがふさわしいとおもわれる個所で，敬称であるかのような使われ方をしている。たとえば，O Bulkington (p. 149) など，彼の半人半神としての神格が讃えられているときに，O が使われている。Delight—top-gallant delight の top-gallant は，十字架にみたてられた上檣，の意のほかに，もっとも (top) 雄々しく (gallant) の意が掛っている。Father Mapple の説く Delight は，十字架上の死によって成就される，もっとも雄々しい，永遠の歓喜であり快楽 (eternal delight and deliciousness) であることになる。

Father Mapple には，どこか接穂されたようなところがある，と Ishmael はいう，there were certain engrafted clerical peculiarities about him (p. 67)。少くとも Mapple の名から判断すれば，Mapple は，Maple＋apple であるようにみうけられる。Maple については，すでに第6章 '*The Street*' で，Maple が生命の樹の象徴であるかのように，Ishmael は述べている。

> In summer time, the town is sweet to see; full of fine maples—long avenues of green and gold. (p. 62)

Ishmael はまた，Father Mapple の印象を芽吹き始めた春の新緑のようであると語っている。

> At the time I now write of, Father Mapple was in the hardy winter of a healthy old age; that sort of old age which seems merging into a second youth, for among all the fissures of his wrinkles, there shone certain mild gleams of a newly developing bloom—the spring verdure peeping forth ever beneath February's snow. (p. 67)

古木のような風趣の Father Mapple の皺の組織の裂け目から，もう一度花やぐ青春が萠えはじめたような，あるおだやかな微光が輝き出ていた，と Ishmael はいう。岩のように日焼けした，古木のような Father Mapple に花が咲く，これは，ヨゼフの杖に花が咲く，あるいは，バラの蕾号の十字架のような檣頭に赤い花のような帽子をかぶった鈴なりの水夫たち，など，一連の復活のイメージの一つである。復活の可能性については，聖書の中に数かぎりなくそれを示す比喩が語られている。しかし復活がどんなばあいに当てはまるのかは，わからない。Father Mapple が，mortal or immortal, here I die. I have striven to be thine, more than to be this world's, or my own. Yet this is nothing; I leave eternity to Thee; (p. 81) といった言葉の中には，Ahabが，白鯨という壁のむこうには何もないかもしれない，と云ったような，そのような不信のはいりこむ余地はある。Ahab は何も言わなかったが，Father Mapple の説教のもっとも重要な部分であるこの個所から判断すれば，復活と不滅が存在する可能性は，高いことになる。Ahab は，その可能性の高いことを感じていて，白鯨とともに彼自身の死を求めようとしたのだろう。不信はあっても信じて努力するのみ，そのような人こそ eternal delight and deliciousness を得る，と Father Mapple はいうが，これは Ahab に当てはまるだろう。接穂というのは，古い自己からの脱皮という意味かとおもわれる。apple についての言及は，白鯨追跡直前の章，'*The Symphony*' で，Starbuck の説得にもかかわらず結局追跡を決意するときに，みられる。

> But Ahab's glance was averted; like a blighted fruit tree he shook, and cast his last, cindered apple to the soil. (p. 685)

「Ahab は眼をそむけ，病んだ果樹のようにふるえ，最後の黒ずんだ実を土に落した。」豊田氏注では，Apple には瞳の意があるとの指摘があるが，このapple は，やはり，胴枯れ状態の古いリンゴの樹から，黒こげになった果実の最後の一つが落ちた，の意にとることができる。blighted や cindered は，日照りで乾燥したり，焼けて黒こげ，の意であるから，不毛，焼焦げ，灰・不死鳥，のイメージをもつ。Ahab 自身が焼けた古樹のように身をふるわせて…とあるが，これは Ahab が，古い Ahab から脱皮し，新しい Ahab へと移行する過渡期の最終段階を示しているようにみえる。古い apple tree から新しい maple へ接穂されて生れかわるかのようにみえる。Mapple (＝maple＋apple) という名は，この作品の最終段階における Ahab 自身の実体の変容の可能性を暗を示しているものとおもわれる。apple についての言及は，第100章 '*Leg and Arm*' にもみられるが，apple と Ahab については，その章で述べることにする。

次の '*The Bosom Friend*' の章と関わりがあり，また *Moby-Dick* 全体にわたってさまざまに形をかえ繰り返えしあらわれるものとして，chest のイメージがある。

> ①He (Father Mapple) paused a little; then kneeling in the pulpit's bows,

folded his large brown hands accoss his chest, up lifted his closed eyes, and offered a prayer so deeply devout that he seemed kneeling and praying at the bottom of the sea. (p. 70)

②His deep chest heaved as with a ground-swell; his tossed arms seemed the warring elements at work ; and the thunders that rolled away from off his swarthy brow (p.78)

Bulkington という屈強な船員がいて，'*Spouter-Inn*' と '*Lee Shore*' の章で，彼について語られるが，彼の胸は，a chest like a coffer-dam (p.41) と説明され，大きく張った立派な肩とともに，彼の胸が箱のようである，と強調されている。coffer-dam は，囲いぜき，潜函，など，水中に沈める箱，として，石棺，の意をもつ。このような意味の，箱，と Father Mapple の胸とが呼応し合い，海中から再生したヨナ，として，また鯨そのものが，chest，石棺，の意をもつ。胸と箱は，象徴として相互に置換しあう関係にある。また胸の高鳴りや鼓動は，海の波の起伏とたがいに呼応しあう同じ原動力によって動かされているかのように扱われている。海のながく強くゆったりとした波打ちが，眠っているサムソンの胸にたとえられたり ('*The Symphony*')，緑の毛布をまとって大地の下に眠っている Lazarus にたとえられたりする ('*The Pacific*')。Fathere Mapple の胸の高鳴りと，海の強く激しい，または，ながくゆったりとした波の起伏は，同じように生命の脈動を示し，小宇宙としての人間の現象と大宇宙としての自然の現象がたがいに連動し合っているようにえがかれている。あるいはむしろ，人間の心や行為が，自然現象の中に反映されて，自然現象を導いている，といえるかもしれない。たとえば，イエス・キリストが十字架上で息絶えたときに，天がにわかにかき曇り，日蝕のような現象が起ったと記録されているのや，Ismael が，'*Epilogue*' の章で，一人水の中から浮上し，海上をただようとき，海は凪いで平安そのものの姿を示し，鮫も彼を襲うことがなかった，など，人間が自然現象を左右しているかのようにえがかれている。人間が万物の長である，と神がアダムにいわれた理由のひとつは，人間と自然との，このような連動を云うのかもしれない。ともあれ，ヨナが，水函 (coffer-dam) か石棺 (chest) に入ったような形で，水底に沈んだのち，ふたたびよみがえって浮上するという救いの構図が，降下と上昇という空間の垂直性と連続しているようにえがかれている。朝の身づくろいとして，Queequeg が胸と腕にほどこした斎戒沐浴は，すでに述べたように，おそらく，Queequeg が，儀式として身を清めたものだろう。①の文の Father Mapple の腕は，胸の上に十文字に組まれて，たがいに調和と宥和の状態にあって静止している。これは，'*The Pacific*' や '*The Symphony*' で語られる大自然の状態を示している。'*The Pacific*' や '*The Symphony*' という章の表題に，人の心がそういう状態にあるという象徴的な意味が入っていることはいうまでもない。②の文では，Father Mapple の両腕は，荒れ狂う暴風雨のようであり，

四大のうちの二要素，風と水がたがいに争っているようにみえると書かれている。Father Mapple の厚い胸は大波のように起伏して，腕を振り上げている彼の身は嵐にゆさぶれているようであり，会堂の外の嵐とたがいに呼応しあっているかのようである。Melville の超絶主義的な考え方は，このように具体的にイメージのはっきりした形で，エマソンが非具体的に唱えた教義を *MobyDick* に手法として導入したものと受けとることができる。Father Mapple の胸の内の嵐と会堂の外の嵐は，併行現象であってたがいに感応し同調しあっている。胸と腕だけを洗う Queequeg の朝の洗面の行為にも，これとあい似たものがあって，というより彼は，むしろ胸と腕の神聖さの意義をさき取りして予感し，身を清める儀式(ablution)を行ったと考えることができる。Queequeg は，敏感に大自然に共鳴し，しかも言語表現を必要最少限度に控えて，ほとんど沈黙しているなど，自然そのものの精緻な縮図のようなところがある。Queequeg は，その身を清め，言動を正し，肉体というわが身の小宇宙を向上させていくので，Adam が，失った楽園を Queequeg 自身の精神と肉体をとうして奪回しようとしているかのようである。その意味では，Father Mapple も Ahab も Queequeg もその身に Adam をとどめていて，かっての罪をあがなおうとしているかのようである。そこには，時間も空間も超越したものがあって，彼等は，たがいに Adam であり，それぞれの身内に自然を蔵した小宇宙であり，たがいに同調・感応しあい，identity を共有しあっているようにみえる。彼らは，自然およびたがいの間で感応しあう精度がきわめて高く，震駭教徒と一般に呼称される Friends' Society の人々のように，内なる光と声に導かれて，敏感に，自然の運行と現象をとうして送られてくる神なるものの意志をとらえる。Father Mapple も Ahab も Queequeg もその意味では，正統な超絶主義者である。説教壇の背後の壁面に掛けられた絵画の中の嵐にもまれる船も，Father Mapple の胸の内の嵐と同質の象徴である。

要するに，'*Sermon*' の章で象徴として強調されているのは，空間を貫く大きな垂直線をつくっている下降と上昇の動きである。この象徴は，罪によって下に落ちた者が，死という代償を払い，悔い改めたために，許されて再び上にあがる，というだけの意味ではない。もっとも深く落ちた者がもっとも大きく上昇の歓びを受けるという fortunate fall の意味がふくまれている。もっとも大きな罪びとである Jonah がもっとも大きな恩寵を受けるという意味がふくまれている。この救いの構図を示すためには，抹香鯨がもっともふさわしい。抹香鯨は他の種類の鯨と比較して，もっとも深く潜ることができる。抹香鯨が白鯨を表わす種類として選ばれた理由の一つが，このためであると考えられる。事実は，抹香鯨は，鯨のうちでも，もっとも捕獲しやすいらしい。Melville がこれを知らないはずはないが，象徴としてふさわしいので，抹香鯨が選ばれたものとおもわれる。日本の捕鯨資料には，つぎのように記録されている。太地五郎作著「熊野太地浦捕鯨乃話」(宮井平安堂，昭和57年，P 33) によると，「この鯨は性最も遅鈍であって十数本の銛にても仕止める事

が出来，死しても他鯨の如く沈まず，時としては一隻の舟にて二頭も仕止める事がある。」と記るされているが，このような事実は，『白鯨』の抹香鯨のもつイメージとは，まったく相違するが，このことを，Melville が『白鯨』を世界観を表現するための，純粋に象徴として，あるいは，神話的象徴として，受けとめれば，『白鯨』全体を通じて，Melville の抹香鯨は，象徴としての論理性を一貫して保っている。

Father Mapple は，彼の説教の中で，つぎの文で見られるように，ヨナと，スペインのコンポラステラ巡礼のもととなった聖ヤコブ伝説とを，結びつけている。

> He skulks about the wharves of Joppa, and seeks a ship that's bound for Tarshish. There lurks, perhaps, a hitherto unheeded meaning here. By all accounts Tarshish could have been no other city than the modern Cadiz. That's the opinion of learned men. And where is Cadiz, shipmates? Cadiz is in Spain; as far by water, from Joppa, as Jonah could possibly have sailed in those ancient days, when the Atlantic was almost unknown sea. Because Joppa, the modern Joffa, shipmates, is on the most easterly coast of the Mediterranean, the Syrian; (p72)

Father Mapple が，今までに気づかれたことのない意味，a hitherto unheeded meaning，だと云って指摘しているのは，ヨナがシリアの Jaffa からスペインの Cadiz まで船で行こうとしたことであるが，ヤコブ伝説によると，ヤコブの遺体が，といってもヤコブの頭部のみが，石棺の船に乗せられて出発した地が Jaffa あるいは Joppa であり，それが打ち上げられた地がスペインであること。その地で，いわば，ヤコブが復活して，ヤコブ巡礼のもととなったことである。『白鯨』の中で，いたるところに織り込まれているヤコブの故事は，旧約聖書で述べられているヤコブの梯子にかぎらず，新約聖書の，イエス・キリストの兄弟であるといわれている小ヤコブ，James the Less，や，十二使徒の一人である大ヤコブ，James the Great の故事もふくまれている。小ヤコブは石で打たれて殉教したと云われている。石棺からよみがえる，あるいは，'*Nantucket*' の章でみられるような，岩棚の上に花枝や樹木が繁る，など，死や不毛の中にふたたび生命が接木される境地を，Father Mapple は彼の身のこなしに示しており，それを，there were certain engrafted peculiarities about him (p67) というのだろう。

注，使用テキストは，

Moby-Dick(1851i) by Herman Melville Edited with an ntroduction and annotation by Charles Feidelson, Jr. (Bobbs-Merrille Educational Publishing, Indianapolis) (1964)

日本語訳は，阿部知二氏訳を参照